

さて今年も新入職員を迎える季節となりました。総勢57名の人数です。全職員数も430名となりました。そのうち研修医が7名、看護師が30名です。先輩諸氏は全力をあげて教育をして行きます。新人職員はダイヤモンドの原石と言われます。教育という磨きをかければ光り輝くことでしょう。

先日大阪時代の友人に会い、酒を酌み交わしました。友人といっても特別な友人で、親友どころか兄弟のような存在です。私は研修医時代、同じ病院に同級生がおらず、3年目に大阪の病院（国立循環器病センター）で1年間の研修をしましたが、その時初めて2人の心の友と出会い、いまだに親交が続いております。また、大江先生という心の師にも出会いました。今年の研修医も皆仲が良く、その中から一生の友や師となる存在と出会ってくれればと思います。同級生は良き友であると共に、良きライバルでもありますから、お互い触発して切磋琢磨し成長してもらいたいものです。これは研修医だけでなく、他の職種でも同じです。大きな成果を挙げられることを期待します。

今月の投書箱に医師の診察についてのコメントがありました。医師＝聴診器というイメージがあり、これは間違いではありません。CTやMRIなど高度な医療機器も簡単に撮れる時代となり、医師は聴診器だけでなく、いろいろな手段を持って診断をして行きます。特に医師は以前にも書きましたが、五感を駆使し診療に当たりますが、医療機器もその一つとして活用しています。ではその時代に聴診器が必要かという点、「絶対に必要だ」と声を大にして言いたい。医師にとって聴診器は目であり、耳です。CTやMRIが無い病院もあり、聴診器ひとつでいろいろ診察をしなければならぬ局面が今後必ず出てきます。ぜひ聴診技術を上げてもらいたい。聴診器のもう一つの効果に、患者さんを直接触るといふ医療独自の世界があります。通常幾ら仲が良くても他人の体を触ることはご法度です。医療の現場のみ触診が基本手技として認められており、逆にしなければならぬことです。十分に研修をし、技術を高めてもらいたいものです。

新人さんと呼ばれるのも3ヶ月間のみです。頑張ってね。

